

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (31)



BENYOWSKY, M.A. : *Memoirs and travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky.*  
2 vols. Dublin, 1790. (本学図書館所蔵)

由に失脚すると、翌年、老中職に就いた松平定信は鎖国体制の厳守と国内の乱れを正すことを政策に掲げ、北方交易などの進歩的な言論を厳しく取り締まる寛政の改革を始めました。

### ■欧米で奔放に活動し、『航海記』を執筆

話は戻ります。ベニョフスキーたちはインド洋からマダガスカルを経て、喜望峰経由で1773年にフランスへ到着しました。彼らは歓迎される中、マダガスカルの植民地化を提言し、ベニョフスキーはルイ15世によって同島の総督に任ぜられました。そして、1774年から現地で開発に携わりましたが、提督たちと対立して1776年にフランスへ戻りました。

やがて、彼はパリや故国ハンガリーで政治活動を始めますが成功せず、アメリカで独立戦争に従軍します。しかし、市民権が得られず苦しんだこともあったようです。

その後、彼はイギリスでフェルナンド・マゼランの子孫に自分の体験を虚飾した旅行記を送り、彼の死後の1790年に『航海記』として刊行されることになります。ベニョフスキーはこの著作で陸軍大佐であった父を伯爵で将軍とし、母を世襲の女伯爵として自分を飾り立てるところから始めます。また、世界各地を舞台にした大げさな記述が面白く、ヨーロッパ各地で人気を博したといわれています。

さらに、ベニョフスキーはマダガスカルを拠点に交易組織を作り奴隷貿易を手掛けました

が、1786年にフランス政府軍と交戦となり射殺されました。

### ■その後の海防論

日本では、林子平が1793(寛政五)年に死去すると、それに合わせるかのようにベニョフスキーがもたらした情報が真実となります。同年、ラックスマンが、また1804(文化元)年にはレザノフがそれぞれ通商を求めるロシア使節として来航しました。1807(文化四)年になると択捉島を攻撃したロシア人と1799(寛政十一)年以降この島の守備に就いていた南部藩兵が交戦に及び、1811(文化八)年には国後島に上陸したグローニンを同藩兵が捕捉しています。さらに、北方だけでなく長崎でも1808(文化五)年にイギリス船フェイトン号が入港して暴行を働くなど、鎖国の形骸化が始まっています。

1793(寛政五)年、寛政の改革の効果が挙がらない中、松平定信が退くと影を潜めていた海防論が甦ります。1798(寛政十)年には本多利明が重商主義経済を唱えた『経世秘策』と『西域物語』を完成させました。また、1823(文政六)年には、佐藤信淵が海外膨張策を論じた『混同秘策』を著すなど、蝦夷地開発や海外貿易を必要とする見解が広がり、古賀侗庵の1838(天保九)年の著作で開国国防論とも評される『海防臆測』に発展します。

何れも乏しい外国情報をもとに、国土開発から海外進出までを提起するものでしたが、モリソン号など外国船が頻繁に来航し始めたことによる危機感と寛政の改革後の財政再建を掲げた天保の改革の閉塞感が漂う中で、この種の書物が増加しながら幕末を迎えます。

そして、これらの思想は攘夷論やそれと相対的な関係にある開国論にも繋がり、ベニョフスキーが書簡を認めてから九十七年後に樹立された明治政府において、富国強兵策や北海道の屯田兵制度に反映されることになります。

### 主な参考文献

- 水口志計夫・沼田次郎編訳『ベニョフスキー航海記』平凡社(東洋文庫160)、1970年。
- 吉田光邦『田沼意次：都市と開発の時代』平凡社 1979年。
- 辻善之助『田沼時代』岩波書店(岩波文庫)1980年。
- 大友喜作編・解説・校訂『北門叢書』全6巻 国書刊行会 1972年。

おくまさよし(司書・事務長兼管理運営課長)